

奈良県十津川村と北海道新十津川町の交流の履歴

－ 災害に伴う集団移住の縁を未来につなぐ －

河本大地
(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))
邱巡洋
(奈良教育大学 学部研究生)

Sustainability of Exchanges between Totsukawa Village, Nara Prefecture and Shintotsukawa Town, Hokkaido:
Connecting the Bond made by Disaster which trigger Mass Migration to the Future

Daichi KOHMOTO
(Department of Geography, Nara University of Education)
XunYang QIU
(Undergraduate Researcher, Nara University of Education)

要旨：奈良県十津川村と北海道の新十津川町は、遠く離れていても密な交流を保っている。1889年に発生した十津川大水害に伴う集団移住を契機とする「母子の村」の縁が、130年の長きにわたり続いている。本研究では、十津川村と新十津川町の交流の履歴について、第二次世界大戦後を中心に概要を把握し整理した。その結果、両地域の交流の歩みは、特徴や状況の異なる4つの時期に区分できることが明らかになった。また、交流は地方自治体どうしにとどまらず、民間団体や学校教育へと広がりを見せており、このことが両地域間の交流の持続可能性を高めている。

キーワード：十津川村 Totsukawa Village
地域間連携 collaboration between local communities
集団移住 mass migration
自然災害 natural disaster
持続可能性 sustainability

1. はじめに

奈良県の十津川村と、北海道の新十津川町とは、「母子（おやこ）の村」の関係にある。その縁は、災害に伴う集団移住を契機にしており、遠距離でありながら130年の長きにわたり続いている。なぜこのような交流が可能になっているのかを探ることは、持続可能な社会を構築するうえで重要である。また、本事例は教材としての意義も大きい。そこで本稿では、十津川村と新十津川町の交流の履歴について、第二次世界大戦後を中心に概要を把握する。

当時6か村に分かれていた現在の奈良県吉野郡十津川村で1889年に発生した十津川大水害では、豪雨によって土砂崩れ、家屋の全壊、田畑の浸水・埋没・消失などが起こり、168名が死亡した。その後、約2,600人が新たな生活地を求めて北海道に移住し、現在の新十津川町の礎が築かれた。その経緯や開拓の実態については、小林宏吉編(1966)や新十津川町史編さん委員会編(1991)、

番匠(2017)などに詳しい。

十津川村と新十津川町は、現在も個人や行政間の交流をはじめ、青年団、小・中学生、スポーツ団体、福祉団



写真1 新十津川町役場前にある「望郷の碑」
河本撮影(2019年10月)。

体などが、様々な形で交流を図っている。これらは、地域活性関係で多用される「関係人口」の最たるものであるとも言える。

2. 新十津川の概要と留意すべき点

「わたしたちのまちは、十津川郷からの団体移住によってひらかれ、たくましい開拓精神と団結の力できずかれた由緒ある町です」。

1970年10月に制定された新十津川町民憲章は、この文から始まる。十津川村と北海道新十津川町ほど、遠距離ながらも密な交流を育んできた例は世界的にも珍しかろう。新十津川町では十津川村のことを「母村」、自らのことを「分村」と呼ぶなど十津川村に敬意を表し、「母子（おやこ）の村」としての関係を築いてきた。新十津川町章は十津川村章と同じ「菱十」である（写真2）。



写真2 新十津川町役場にて
左は十津川村の玉置神社。右は新十津川町の町民憲章。河本撮影（2019年10月）。



写真3 十津川村からの入植者の多かった新十津川町花月の景観
河本撮影（2019年10月）。

新十津川町は、北海道空知地方にある人口約6,500人（2020年現在）の町である。石狩川流域の豊かな水に恵まれた肥沃な平野が広がる、道内有数の米どころとなっている。1889（明治22）年8月に発生した十津川大水害によって生活基盤を失った村民2,489人が、はるばる北海道に移住して入植した新天地である。1902年4月の二級町村制施行で新十津川村となり、1957年1月に町制施行した。十津川出身者は、入植後も故郷を忘れず、多くは玉置神社から分霊した神社（写真4）等を拝み、剣道をたしなむ伝統や、民俗芸能の踊りなどを継承してきた。



写真4 「玉置神社」の銘のある新十津川神社
河本撮影（2019年10月）。

ただし、新十津川町において現在、十津川村出身者の子孫である「十津川衆」は人口の1割を切っており、3%未満とも言われる。「十津川衆」の家庭が十津川村同様に神道を信仰していることが多いなどの特徴はあるが、町内に「十津川衆」としての組織的なつながりは特になく、十津川村との親戚づきあいを有する世帯も僅少である。

また、十津川村ではあまり意識されていないが、新十津川にアイヌの人々の苦難の歴史があることは無視できない。新十津川町の小学生が使っている社会科副読本『わたしたちの新十津川』（新十津川町社会科副読本改訂委員会編、2018）には、「明治時代に入り、十津川村から多く人びとが移住してきたために、アイヌの人びとは、1カ所に集められ、その後、だんだんと人数を減らしていきました。移住して来た人びとは、厳しい北海道の自然の中で暮らしていくために、アイヌの人々に生きるための知恵をいろいろと教えてもらい、大変助けられたようです」とある。さらに、新十津川町には富山県・新潟県や四国、そして吉野郡各地（現在の五條市西吉野町、吉野町、東吉野村等）出身者の子孫も数多い。

十津川村出身者の子孫が、新十津川町域から流出した要因として、開拓の困難さがあったことは言うまでもな

い。新十津川町は石狩川に面した広大な氾濫原に水田が開かれているが、十津川村出身者は山林労働にはたけていても平地の水田開発や灌漑・治水等の技術や経験をあまり持っていなかった。アイヌの人々や他県出身者の力があってこそ、新天地で生活基盤を築き、現在に至る米作地域の形成がなされたことには留意しなくてはならない。他方で、新十津川以外の北海道各地で村出身者が築いてきた歴史にも、光を当てる必要がある。

とはいえ、「母村」としての十津川村との濃密な関係が築かれてきた事実は特筆に値する。以下では、その概要について、具体的事例を参照しつつみていく。

3. 十津川村と新十津川との交流の歴史

「母子（おやこ）の村」としての交流の歴史を、十津川村の村報で探ってみよう。表1から、交流は大きく4つの時期に分けられる。順にみていこう。

3.1. 1969年以前の交流

1954年から毎月出されている「村報十津川」における新十津川関連の初出は、同年12月の記事「新十津川村の台風惨禍！！」である。青函連絡船洞爺丸の沈没事故を引き起こした台風が、新十津川にも家屋被害2,123戸などの被害を及ぼしたことに對し、「一昨年は当村より彼地に親善訪問し昨年は彼地より代表者の来訪があるなど公に私に親密の度を加えております。いわば兄弟とも申すべき間がらであります、何の因果でしようか」等と記し、見舞の辞を述べている。当時から親善訪問という形で十津川村と新十津川村との間の行き来が繰り返されていたことがわかる。1958年11月15日の「大和タイムズ」には、「現在も十津川村との交流は盛んで、先般も村長や村会議員がこの新十津川村を訪問、郷土の大事なお客として丁重なもてなしを受けた」とある。

当時は行政関係者の行き来が目立っていたが、1962年10月には十津川村青年団による新十津川町訪問研修旅行が14名で始まった。同年の村政報告書には、同町における「町民各自が『我々は十津川人である』との誇りをもつての真剣な町づくりを見学して将来村を背負ってたつ青年達にはよい研修であった」とある。また、「この町では毎年町費で優良青年を先進地に派遣して新しい知識と進んだ技術を郷土発展にとり入れているとのことであるが我青年団もかくありたいものである」と記されている。

この年には、剣道団体どうしの交流もスタートした。新十津川町尚武会が十津川村を訪ね、役場で母村訪問親善試合を行った（写真5）。さらに1963年には、新十津川町から町会議長、教育長などが来村し、十津川高校の百周年記念式に出席している。1966年には新十津川町に開拓記念館が落成した。この年も8月に、新十津川町より総勢25名が来村している。

このように、1950年代・60年代の交流は行政関係者同士からスタートし、青年団、剣道団体の交流に波及し、また十津川村にとって重要な組織の節目には新十津川町からの代表者出席もあるという多様化の時期であった。



写真5 十津川村役場で開かれた新十津川町尚武会一行母村訪問親善試合（1962年）
十津川村役場所蔵。



写真6 新十津川町開拓記念館
河本撮影（2019年10月）。

表 1 十津川村の村報にみる「母子の村」の交流（1960年以降）

| | 開町・村記念式典 | 郷友会記念式典 | 青年団・青年協会 | 尚武会・剣道クラブ | 老人クラブ | 児童生徒の研修訪問また修学旅行 | 踊り保存会 | 太鼓倶楽部 | 水害慰霊祭 | その他 |
|-------|----------|---------|----------|-----------|-------|-----------------|-------|-------|-------|-----|
| 1960年 | ○ | | | | | | | | | |
| 1961年 | | ◇ | ● | | | | | | | |
| 1962年 | | | ○ | ● | | | | | | ○ |
| 1963年 | | | | | | | | | | ○● |
| 1964年 | | | | | | | | | | |
| 1965年 | | | | | | | | | | |
| 1966年 | | | | | | | | | | ○● |
| 1967年 | ○ | | | | | | | | | |
| 1968年 | | ◇ | | | | | | | | |
| 1969年 | | | | | | | | | | ● |
| 1970年 | ○ | | ○ | ◇ | | | | | | |
| 1971年 | | | ○ | ◇ | ● | | | | | |
| 1972年 | | | ○ | ● | | | | | | |
| 1973年 | | | ○ | ○ | | | | | | ● |
| 1974年 | | | | ○ | | | | | | |
| 1975年 | | | ○ | | | | | | | |
| 1976年 | | | | ◇ | | | | | | |
| 1977年 | | | ○ | | | | | | | |
| 1978年 | | | | | | | | | | |
| 1979年 | | | ○ | | | | | | | |
| 1980年 | ○ | | ○ | | | | | | | |
| 1981年 | | | | | | | | | | |
| 1982年 | | | | | | | | | | |
| 1983年 | ○ | | | ◇ | | | | | | |
| 1984年 | | | ● | ◇ | | | | | | |
| 1985年 | | | ○ | ◇/○ | | | | | | ● |
| 1986年 | | | | ◇ | | | | | | |
| 1987年 | | | ● | ◇ | | | | | | ◇ |
| 1988年 | | | ● | ◇ | | ● | | | | ○● |
| 1989年 | | | ○ | ● | | | | | | |
| 1990年 | ○● | ◇ | ● | ◇/○ | ○ | ● | | | | |
| 1991年 | | | ○ | | | ● | | | | |
| 1992年 | | | | | | | ● | | | |
| 1993年 | | | | | | | | | | |
| 1994年 | | | | ○ | | | | | | |
| 1995年 | | | | | | | | ● | | |
| 1996年 | | | ● | | | | | | | |
| 1997年 | ○ | | ○ | | | ● | | | | |
| 1998年 | | | ● | | | | | | | ◇● |
| 1999年 | | | | | | ● | | ● | | |
| 2000年 | | | | ◇ | | ○● | | ● | | |
| 2001年 | | | | ◇ | | | | | | ● |
| 2002年 | | ● | ● | ◇ | | ● | | | | |
| 2003年 | | | ● | ◇ | ● | ● | ● | ● | | |
| 2004年 | | ◇ | ● | | | ● | | | | ● |
| 2005年 | | | ○ | ● | | ○● | | ● | | |
| 2006年 | | | | | | ● | ● | ● | | ● |
| 2007年 | | | | | | ● | | ● | | |
| 2008年 | | | ○● | | ● | ● | | ● | | ● |
| 2009年 | | | ○ | | | ○● | | ● | | |
| 2010年 | ○ | | | | | ● | | ● | | |
| 2011年 | | | | | | | | | | |
| 2012年 | ○ | | ○ | | ● | ● | | ● | | |
| 2013年 | ○ | | ● | | | ● | | | | |
| 2014年 | ○ | | ○ | ○ | | ○● | | | | |
| 2015年 | ○ | | ● | | | ○● | | | | |
| 2016年 | ○ | | ○ | | | ○● | | ● | | |
| 2017年 | ○ | | ● | | | ○● | | ● | | |
| 2018年 | ○ | ◇ | ○ | | ● | ● | | ● | | |
| 2019年 | ○ | | ● | | | ○● | | | | |
| 2020年 | | | ○ | | | | | | | |

*○は十津川村→新十津川町（村）、●は新十津川町（村）→十津川村、◇は他地域での交流を示す。

十津川村役場が毎月発行している「村報十津川」を用いて作成。

3.2. 1970年～1989年

表1からわかるように、この時期は青年団および剣道団体の交流が活発化した。この点が1960年代までの大きな違いである。特に十津川村から新十津川町への訪問が毎年続いた時期がある。

さらに、1971年には新十津川町から老人会の訪問もあった。1973年には新十津川町・十津川村吟詠交歓会が開かれた。また、新十津川町議会施設委員が来村した。1976年には新十津川町長などが十津川村新庁舎の落成式に出席した。

その後、児童文学作家で奈良県立高校や奈良教育大学に勤めていた川村たかし作の児童小説『新十津川物語』が、1977年から1988年にかけて、単行本全10巻の形で偕成社から刊行された(写真7)。1889年に発生した十津川大水害で両親を失った津田フキは、兄とともに新天地を求め、北海道開拓に向かう集団に加わり、苦勞して新十津川村を開拓する第一世代の住民となった。本作では、過酷な自然と運命に翻弄されるフキの80年近い人生を描きつつ、フキの子供時代や子・孫・曾孫、波乱万丈の日本の近代を生き抜いた様々な人々の姿が描かれている。川村氏は五條市からたびたび十津川村に足を運び、本作を構想・執筆した。



写真7 川村たかし『新十津川物語』(一部)
奈良教育大学図書館にて河本撮影。

1979年には、翌年に新十津川町が開基90周年を迎えるにあたり、新十津川町に「郷土の一部」として十津川村から川石と、玉置山の杉と桧の株が贈られている。

1985年には新十津川町獅子神楽保存会一行が来村した。

1987年には、橿原市の近鉄百貨店で「新十津川町展」が開かれた(写真8)。十津川村と新十津川町の歴史や特徴が資料展示され、また特産品の販売も行われた。

1988年には、新十津川神社(写真4)が十津川村の木材で改築された。一方、奈良県で開かれていた博覧会の見学を兼ねて、新十津川町の「なら・シルクロード博



写真8 橿原市の近鉄百貨店で開かれた新十津川町展
(1987年)
十津川村役場所蔵。



写真9 武蔵の山村振興センターで開かれた新十津川町青年団研修の歓迎会(1988年)
十津川村役場所蔵。

と十津川訪問団」の一行 99 人が来村した。

また、この年、新十津川町から児童生徒の研修訪問もあり、その後活発化する小中学生の交流へと道が開かれた。

1970・80年代でもっとも交流が活発だったのは、青年団である。写真9にみられる親密さからも、密な交流をうかがい知ることができる。

3.3. 1990年（十津川村置村100年）～2010年

1990年は、十津川村の置村100年と新十津川町の開基100年が重なる、節目の年であった。互いに行政関係者をはじめとするさまざまな団体・個人が行きかい、交流は大いに盛り上がった。村の駅伝大会には、新十津川町のチームが参加した。新十津川踊り保存会の10周年記念式典も開催された。十津川村の置村百年記念式典が挙行された。十津川村役場前には津田フキの像と、新十津川町の「望郷の碑」（写真1）が除幕された。十津川村では1889年発生の十津川大水害で生まれた大崩壊地を活用した「21世紀の森」で、水害記念碑「十津川に昇る太陽」が除幕された。

また、十津川村には関東・関西・中部など各地に「郷友会」があるが、その中でも規模の大きい関東十津川郷友会の総会は、東京の銀座で開かれた（写真10）。



写真10 関東十津川郷友会総会（1990年）
十津川村役場所蔵。

1991年から1992年にかけては、先述の川村たかし原作の『新十津川物語』が、テレビドラマの形で「明治編」「大正編」「昭和編」各2部（全6回）に分けて、NHK総合「土曜ドラマ」にて放送された。1993年には、『新十津川物語』の舞台となった新十津川町に、本作にちなんだ「新十津川物語記念館」が開設された。

1998年には、新十津川町と十津川村の音楽家がともに奈良交響楽団の交流コンサートに参加し、交流演奏をした。また、新十津川町の日赤奉仕団が来村した。

その後は、2001年の新十津川町の職員研修生の来村、2004年の第50回十津川村駅伝大会への新十津川村チームの特別参加、2006年の新十津川町の議員一行の研修



写真11 十津川村青年団の新十津川町訪問
十津川村役場所蔵。



写真12 新十津川町の児童生徒・教職員の来村
十津川村役場所蔵。

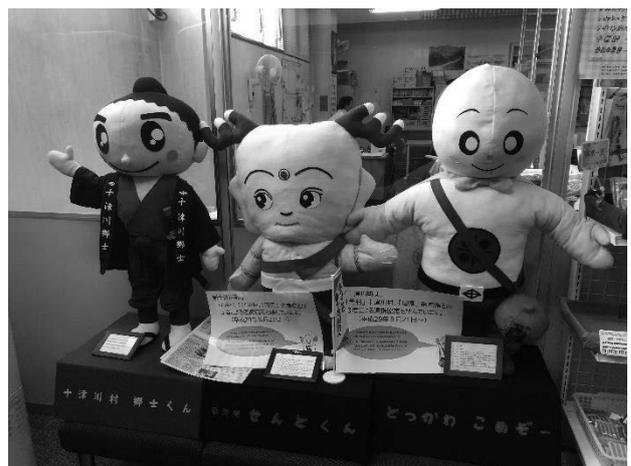


写真13 新十津川物産館にて
河本撮影（2019年10月）。

としての来村などが特筆される。2008年には新十津川町の獅子神楽保存会が結成100年を記念し、玉置神社に獅子神楽を奉納するために、例大祭に合わせて来村し

た。

1990年からの20年間を見ると、小中学校の児童生徒の研修訪問や修学旅行が大変活発に実施されたことがわかる。特に2002年以降は毎年行われている。青年団や剣道団体は、毎年だったり数年空いたりともムラはあるが、継続的に交流している。そして、この20年間は新十津川町からの来村が、十津川村からの新十津川町訪問の頻度を上回っていた。特に、水害慰霊祭には毎年のように参加がある。太鼓クラブや踊り保存会といった文化団体や、老人クラブの交流も、新十津川町からの来村がほとんどであった。

3.4. 2011年（紀伊半島大水害）以降

2011年に発生した紀伊半島大水害は、活発化した交流の転機となった。この年、新十津川町からの3人の職員が災害応援隊として、母村の復旧支援のために来村した。また、新十津川町長が来村し、復旧の見舞金と義援金を提供された。新十津川町の社会福祉法人「明和会」の職員が、高森の郷に介護応援のために来村した。新十津川農業高校から十津川高校にも、応援メッセージと米袋が贈られた。

翌年には、多くの交流が再開された。新十津川町からJAビンネ（ビンネ農業協同組合）が応援のために来村した。2013年には、新十津川町北のマリンバアンサンブルが十津川村で演奏した。2014年には新十津川町の選手団「絆」が、第60回十津川村駅伝大会に参加した。2016年には新十津川町産の食材を給食に取り入れた「絆給食」が十津川村で実施された。

2017年8月には、奈良県と十津川村と新十津川町の3者が連携協定を締結した。その後、共同の物産販売・PRやイベント出展、新十津川町内の宿泊施設への奈良県からの宿泊者へのおもてなしプレゼント、母子（おやこ）の村パンフレットやリーフレット「十津川の縁」の作成、新十津川町での奈良県民限定「十津川の縁モニターツアー」の実施、共同の商品開発、奈良市内のアンテナショップでの新十津川町産品の常設販売などが行われている。

なお、2020年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行に伴い、十津川村と新十津川町の相互訪問はほとんど実施できなかったが、オンラインでの交流やメッセージの発出など、このコロナ禍を乗り越えて交流を持続させようとする努力が払われた。たとえば、首長同士の十津川村130周年特別リモート対談「いま、原点に立ち帰って」が実施された（十津川村教育委員会編、2020）。

4. おわりに

1889年に発生した十津川大水害に伴う集団移住を契機とする、十津川村と新十津川町の「母子の村」の縁は、

130年の長きにわたり続いている。本研究では、両地域の交流の履歴について、第二次世界大戦後を中心に概要を把握し整理した。その結果、両地域の交流の歩みは、特徴や状況の異なる4つの時期に区分できることが明らかになった。

1950・60年代の両地域間の交流は、行政関係者をはじめとして、青年団や剣道団体にも及んだ。1970・80年代には、青年団を中心に、両地域間の交流がいっそう活発になった。1990年から2010年にかけては、両地域の青年団と剣道団が一定の交流を保った一方で、文化団体や老人クラブなどの民間団体も交流を活発化させた。さらに、両地域の小・中学校は研修訪問や修学旅行などを通じて交流を深めるようになった。2011年に十津川村とその周辺で発生した紀伊半島大水害以降は、自然災害からの復旧に新十津川町の支援があり、また共同事業の活発な実施がみられる。

本事例からは、地域間の交流・連携の持続可能性が、地方自治体どうしにとどまらず、民間団体や学校教育へと広がることで高まっていることがわかる。自然災害が契機となっていることや、さらなる自然災害を克服するという切実性も、絆をさらに深めることにつながっている。

付記

本研究は、十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施しました。新十津川町および十津川村における現地調査にてお世話になりましたみなさまに、厚くお礼申し上げます。また、学芸員の藤重季恵さま、南隆哲さまをはじめとする十津川村教育委員会のみなさまにも、調査の便宜を多々図っていただきました。感謝申し上げます。

執筆は基本的に河本が行いましたが、邱も第3章の表1の一部を作成し気づきをまとめるなど、本稿の作成にあたり重要な役割を担いました。

参考文献

- 小林宏吉編（1966）、新十津川町史、北海道樺戸郡新十津川町役場、1065P.
- 新十津川町史編さん委員会編（1991）、新十津川百年史、新十津川町役場、1360P.
- 新十津川町社会科副読本改訂委員会編（2018）、わたしたちの新十津川、新十津川町教育委員会、164P.
- 十津川村教育委員会編（2020）、十津川村置村130年記念誌、十津川町教育委員会、45P.
- 番匠健一（2017）、「災害難民とコロニアリズムの交錯—十津川村の北海道移住の記憶と語り—」、立命館言語文化研究、第29巻、第2号、pp.117-132.

